

日本の文化を着る

三重県

富田剣道少年団

中学1年 佐藤 陽

日本に「武道」という文化が成立したのは意外と新しく、その姿が確立されたのは、江戸時代に入ってからだといいます。

私が剣道に携わる様になって、剣道に出会う前には興味を持つ事が少なかった日本文化の素晴らしさに、心動かされる事が一つ、また一つと増えていったように感じます。美しい四季、自然、美味しい食べ物、建造物など日本には素晴らしいものが沢山あります。もちろどここの国にも素晴らしいそれらが沢山あるかと思いますが、やはり日本の良さは、他の国と比べられない独特の素晴らしさがあるように感じるのです。

私が剣道を志してから初めてやりだした事の一つに、アイロンがけがあります。アイロンは、母がかけてくれるもの。そう思っていた私が、アイロンを手にする姿は、家族の目にどう映っているでしょうか。私は、剣道の事で悩んだり、考えたりしている時にアイロンがけをする事があります。袴のヒダのアイロンがけは難しく、細かい所にコテを当てていると、無心になって最後にはすっきりとした気分でアイロンがけを終えます。とても不思議な感覚です。武道の袴は、前に五本のヒダがあり、これは

「五倫五常の道を諭したもの」

とされており、五常とは「思いやり」「正しい行い」「礼儀」「判断力」「信頼」といった生き方の指針の意味合いが込められていて、裏の折り目の二本には、

「忠」 先生や仲間を大切に思うまごころ

「孝」 親、兄弟を大切にすること

と、あります。自分で自分の道着にアイロンをかけていると、袴をはくたびにこの「思い」「考え」という文化を身に着けているのだと、ふと思う時があります。そう考えると「日本文化」とは物や形のように、目に見える事だけが引き継がれて来たのではなく、むしろ目に見えない無形のものがそこには多くあるのだなと私は感じます。

私たちの道場ではよく、剣道の所作や着装について先生からお話をさせていただく機会が多くあります。着装の乱れは心を表し、剣を乱すのだと教わっています。先生の着装はいつもとても美しく、稽古が終わった後もピシッとしていて、着崩れていません。まるで先生の明るさ、穏やかさ、凛とした心を映しているように感じます。ですから私も日頃から着装には気を使っています。

稽古に励み、試合で勝つ事は自信に繋がる事ですが、それ以上に剣道を通じて学んでいる事はとても大きく感じるのです。

先日、昇段審査会の様子を、テレビを通して目にする機会がありました。目の色や肌の色、言語や生まれ育った環境がまったく異なる外国の剣士の方達が、私達日本人剣士と同じ場所に立

ち、同じ道着を着、袴をはいて、同じ志のもと、剣道に励む様は、自分の育った国に対して誇りを感じる事のできる時間となりました。「心技体」を一体として鍛えるという事は、剣道の質だけでなく、日本文化を背負っているという事なのだと思います。

剣の道を歩む私達は、日本の心、文化を着ています。この文化に誇りを持ち続けていく事が剣道に携わる者の証となるのではないのでしょうか。姿勢を正して、心を整え、凜とした己を誇りに思える様にこれからも稽古に励み、大切に生きていこうと思います。

何を文化だと感じて、何を文化と思わないかは、人それぞれですが、私は剣道を通じて剣道着や袴を身に着ける事で日本文化に触れていると感じるとともに、先人から受け継いだものを後々まで「つなぐ」という事の大切さを着ているのだと感じています。

この素晴らしい日本の文化が、剣道を通じて、世界中の剣士の方達とともに、百年後の未来へ心と共に続いていきますように。